

## 序 論

## 1. 目的

現代イベリア半島のスペイン語<sup>1</sup>の一般的な使用における直説法単純過去形(e.g. *canté*)<sup>2</sup>と現在完了形(e.g. *he cantado*)<sup>3</sup>は意味的に区別され、前者は発話時と断絶した過去の事象を表し、後者は発話時と何らかの関連をもつ発話時以前の事象を表すとされる<sup>4</sup>。

単純過去形は、過去に生じ、かつその過去の中で限界をもつ出来事を表す<sup>5</sup>。こうした過去性・完結性により、語りの文脈で主要な筋となる前景を構成し、物語の背景をなす未完了過去形と対比的に用いられることもある。

他方、現在完了形は、文法的現在に接近する行為、すなわち「拡張された現在」(過去のある時点と、話したり書いたりしている「今」を結ぶ時間軸)<sup>6</sup>の中で生じた行為を表す<sup>7</sup>。こうした基本的意味は、副詞類、動詞の語彙的アスペクト、文脈などの作用により、「発話時における結果状態」、「発話時に至る継続・反復」、「発話時の直前の事象」、「直前ではないが発話時と関連するものとしてとらえられた事象」などの用法として実現される<sup>8</sup>。

また、二形式の機能的差異は共起する副詞的時間表現にも現れる。次の例のように、単純過去形は発話時を含まない過去の領域に属す時間表現と共起し、現在完了形は発話時を含む

<sup>1</sup> 本論文では、イベリア半島で話される諸言語のうち、いわゆるカスティーリャ語における使用を当面の考察対象とする。以降、この変種を便宜的に半島スペイン語と呼んでいく。

<sup>2</sup> 以降、*canté*にあたる形式を「単純過去形」と呼ぶ。この形式には伝統的に、*pretérito indefinido* (RAE, 1959)、「不定過去」(高橋, 1935, 1958)、「点過去」(瓜谷, 1961)、「完了過去形」(原, 1979b)、*pretérito perfecto simple* (RAE, 1973)、「単純完了過去」などの名称が用いられてきたが、本論文では、もう一方の対象形式(*he cantado*)との形態的・機能的区別をある程度まで適切に示している用語であることを考えて、「単純過去形」という名称を用いる。

<sup>3</sup> 以降、「*haber*の直説法現在形+過去分詞」という形式を「現在完了形」と呼ぶ。この形式には伝統的に *pretérito perfecto* (RAE, 1959)、「完了過去」(笠井, 1933; 高橋, 1935, 1958)、*pretérito perfecto compuesto* (RAE, 1973)、「複合完了過去」などの名称が用いられてきたが、本論文ではこの形式の特徴をよく反映し、一般的にも普及していると見られるこの名称を用いることにする。なお、スペイン語の時制名称の変遷をスペイン語圏および日本国内のスペイン語文法について概観し、あらたな提案をおこなっている研究に寺崎(1990)がある。

<sup>4</sup> RAE (1973: 465), Alarcos (1980<sup>3</sup>: 32-33), Rojo & Veiga (1999: 2902-2903), Cartagena (1999: 2944-2945).

<sup>5</sup> Alarcos (ibid.: 32):

“El perfecto simple designa un hecho sucedido en el pasado y que tuvo un límite en ese mismo pasado; (...)”

<sup>6</sup> Alarcos (ibid.: 28-29)はこの“presente ampliado”という概念を次のように説明している。

“(...) El presente es una fracción de tiempo abstracta, y el presente gramatical, como es sabido, está constituido no por un punto, sino por una línea formada por la proyección de varios sucesivos presentes abstractos. Esta línea ideal del presente gramatical entra, por tanto, en el campo del pasado (...) Así, el perfecto compuesto nos da la idea de un presente ampliado hacia el pasado (...)”

<sup>7</sup> Alarcos (ibid.: 32-33):

“El perfecto compuesto siempre designa una acción que se aproxima al presente gramatical, esto es, que se produce en el ‘presente ampliado’, en un período desde un punto del pasado hasta el ‘ahora’ en que se habla o escribe.”

<sup>8</sup> Alarcos (ibid.: 46).

時間表現と共起することが多い<sup>9</sup>。

Me lo encontré hace un par de días por la calle. 「私は二、三日前、通りで彼に出会った」

Anoche cenaron en mi casa. 「昨夜、彼らは私の家で夕食をとった」

Esta mañana he ido al mercado. 「今朝、私は市場へ行った」

Esta semana lo he visto un par de veces. 「今週、私は彼に二、三度会った」

このように現代半島スペイン語においては、両形式の間に上述のような機能分担が確立しているとみられるが、通時的には、その起源からスペイン語の歴史を通じて常に現代語のように明確な区別が保たれてきたとは言い難い。

現代スペイン語においては、「haber の直説法現在形+過去分詞」という形式はいわゆる現在完了形として時制体系の中に組み込まれている。しかし起源的には、このうちの haber が本来の語彙的意味を保持しており、これが過去分詞と結合することで全体として「過去の行為の現在における結果状態」を表していた。のちにこの起源的意味から「過去」の領域に意味を拡張させ、前述のような用法を獲得して現代に至っている<sup>10</sup>。

一方、現代スペイン語においては発話時点と断絶した過去の行為を表す単純過去形についても起源をたどると、この形式の起源形であるラテン語の完了は絶対的な過去の行為のみならず、現在と関連をもつ行為をも表すことができたとされる<sup>11</sup>。のちに、前述の「haber の直説法現在形+過去分詞」の形式の機能的拡張と相関する形で、「現在と関連をもつ過去」としての機能が次第に弱化し、現代語では絶対的な過去としての使用にほぼ特化している。

こうした二形式の機能的変遷を考慮に入れた上で、今度は現代スペイン語における地域的バリエーションに注目してみる。

現代イスパノアメリカの多くの地域のスペイン語においては、二形式間にイベリア半島スペイン語と異なる使い分けが見られるとされる。具体的には、単純過去形は、発話時と断絶された過去の事象のみならず、前述の「直前」の事象や、いわゆる「拡張された現在」における事象も表すことができると言われている<sup>12</sup>。

前述の二形式の機能分担の歴史と、こうしたラテンアメリカの多くの地域での現代スペイン語の状況を考え合わせると、一見、単純過去形の古い機能が、ラテンアメリカのスペイン語で保持されている、つまり二形式の機能分担が古い段階をとどめているかのように見える。

<sup>9</sup> García Fernández (1999: 3161-3162).

<sup>10</sup> Alarcos (ibid.: 39-46).

<sup>11</sup> 本論文 3.2.1.1., 3.2.2.1. 参照。

<sup>12</sup> 寺崎 (1987), Cartagena (1999).

実際、現代ラテンアメリカのスペイン語の状況はアルカイスモ(古語法)と見なされることが多い<sup>13</sup>。

本論文では、現代語において二形式の機能分担が見せる地理的局面と、そうした機能分担の通時的局面に注目し、これら二つの局面の関連性を考察していく。果たして、大航海時代の半島スペイン語に機能分担の古い段階が存在していて、その状況がそのまま半島からアメリカ大陸に移殖され、その後保持されて現代に至っていると言えるのであろうか。そこで、本論文の関心の対象は、現代語における地理的バリエーション、大航海時代における半島スペイン語の状況、同時代におけるアメリカスペイン語の状況という三点にしぼられる。

こうした問題設定に基づき、本論文では次のような手順で論を進めていく。まず、現代語における二形式の使用の地域的バリエーションを概観し、半島スペイン語とアメリカスペイン語という大局的な視点から、両地域における二形式の使用の相違点・共通点を明らかにする。さらに、半島とメキシコのスペイン語に焦点をしぼり、二形式の使用状況を調査し、各地域における二形式の区別に関わる要因を考察する。次に通時的な観点から問題をとらえなおすために、大航海時代における半島、アメリカ両地域の使用状況を検証する。具体的には、15世紀末から17世紀までに半島で書かれた文学作品と、16世紀から18世紀までに書かれた植民地文書における二形式の使用状況を観察し、各資料で二形式がどのような用法で用いられているか、植民時代の当初から現代語におけるような地域的差異が見られたのかどうか注目していく。

## 2. 調査の方法

本論文でおこなう調査では、各形式の使用頻度の確認、実例の意味的分析を中心に据えていく。分析に際しては、あらかじめ設定した用法へ用例を分類していくほか、共起する時間表現との親和性にも注目していく。また、場合によってはテキストの種類と各形式の現れ方の関係なども考慮に入れる。

第2章でおこなう現代語についての調査では、二形式の使い分けの二大変種の代表として、半島スペイン語とメキシコスペイン語をとりあげる。各地域の戯曲作品における実例を用法ごとに分類し、その頻度を見ることで各変種における二形式の使用傾向を観察する。

第3章では、イベリア半島スペイン語における15世紀末から17世紀の資料の調査をおこなう。まず戯曲形式の作品を分析する。ここでは、第2章の調査と同様、用法ごとの各形式

<sup>13</sup> 4.2.参照。

の使用傾向を観察し、現代戯曲の調査結果との比較を試みる。

また、地の文からなるテキストを見るねらいから、報告書的な性質をもつ自伝形式の作品の調査をおこなう。ここでは、用法上の分析の他に、テキストの種類や展開と各形式の出現との関連性、人称と各形式との親和性、時間表現と各形式との親和性にも注目する。

以上の調査で当時の半島スペイン語の状況のある程度把握した後、第4章では、植民地文書の調査をおこなう。対象としては、16世紀から18世紀にかけて植民地の6都市(サント・ドミンゴ、メキシコ、リマ、サンティアゴ・デ・チレ、トゥクマン、ブエノス・アイレス)で書かれた(もしくはこれらの都市と本国スペインの間でやりとりされた)文書を用いる。ここでも基本的に、各形式の出現傾向を観察し、時間表現との共起などを手がかりに用例の意味的分析をおこなう。また、二形式の出現頻度に関して、テキストの性質、年代、書き手の出身地、名宛人などの要因との関係も考慮に入れる。

### 3. コーパス

コーパスとしては、二形式が一方に極端に偏ることなく現れ、両者の機能的差異が観察しやすいテキストを用いるということに配慮した。

第2章でおこなう現代語の調査においては、戯曲作品を分析する。これは、特に口語的なレベルで機能分担の違いがよく観察できるとされているためである。

第3章、第4章でおこなう歴史的な検証では次の点を考慮した。

まず、第3章でとりあげる半島スペイン語については、現代語の調査結果と比較する目的から、15～17世紀の戯曲形式作品を分析する。さらに、第4章で分析する植民地文書に報告書的な書簡が多いことから、それとの比較を可能にするために、16世紀に書かれた報告書的な性質をもつ自伝形式作品をとりあげる。

第4章で調査する植民地関連の文書については、16世紀から18世紀にかけて上記の6都市で書かれた(もしくはこれらの都市と本国スペインの間でやりとりされた)文書を言語研究のために編纂した文書集を用いる。ここでも、「発話時と断絶した過去」に言及する文脈に偏らず、「発話時と関連をもつ過去」への言及も現れうる性質のテキストを選択した。具体的には、半島出身者、植民地出身者による公的・私的な書簡類、裁判記録、報告書などからの例を分析する。

#### 4. 構成

本論文では、前述した各時代、各地域における二形式の使用状況の調査を中心に論を展開することになるが、各調査に先行して、関連する先行研究や先行調査を確認していくことにする。以降、次のような構成をとる。

第1章、第2章では現代語についての考察をおこなう。

第1章では、現代半島スペイン語における二形式の基本的意味と用法を確認する。次に、従来の研究におけるいくつかの論点に注目し、各形式の時制的・アスペクト的位置付けを試みる。また、異なるアプローチによるスペイン語の時制体系の規定もとりあげる。最後に、時の副詞類と各形式の関係にも言及する。

第2章では、2.2.で現代語における二形式の機能分担の地域的バリエーションを、先行研究に基づき概観する。2.3.以降では、特に現代半島とメキシコのスペイン語に焦点を当てる。2.3.で先行研究による記述を確認した後に、2.4.で両地域の戯曲作品における使用例を分析し、検証していく。

続く第3章、第4章では通時的考察・検証をおこなう。

第3章では、半島スペイン語における二形式の機能の通時的変遷を追う。3.2.でラテン語の起源から中世スペイン語を経てそれ以降の時代にいたる推移を概観する。続く3.3.では、15世紀末から17世紀の半島スペイン語の状況を調査によって検証する。まず3.3.2.では戯曲形式の作品における使用状況、次の3.3.3.では自伝形式の作品における使用状況を観察する。

続いて第4章では16世紀から18世紀までの植民地関連の文書の調査をおこなう。それに先行して4.2.では、先行研究の論考に基づき「アルカイスモ」(古語法)という考え方の妥当性を検討する。4.3.1.では、植民地文書の時制使用を扱った個別研究の観察を確認し、4.3.2.以降で実際の文書を分析していく。

第5章では、第2章から第4章でおこなった調査の結果を総括し、二形式の使用について、現代語における状況と通時的に見られた状況の比較、および関連性の考察をおこなう。